

国立民族学博物館の収蔵品 ④④

ともに生きる——アーミッシュ・キルトから考える

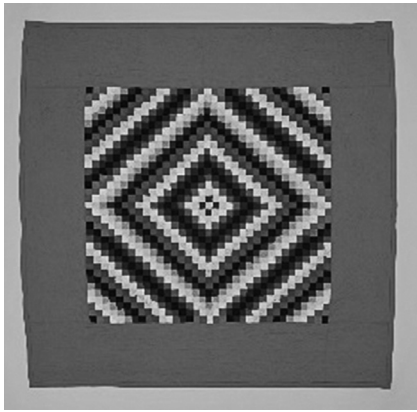


写真1 サンシャイン・アンド・シャドウパターンのベッドカバー。光と影に満ちた人生をともに歩んでほしいという息子夫婦への願いを込めて製作された。(製作：1972年、ペンシルヴェニア州。H0269520)

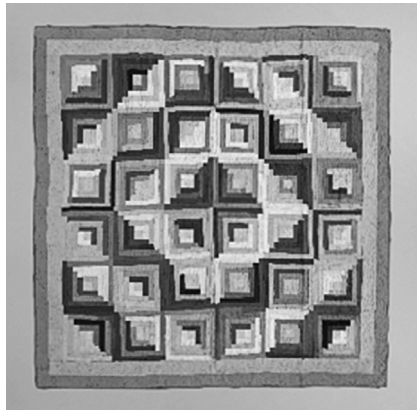


写真2 ログキャビンパターンのベッドカバー（ともに納屋を棟上げするという意味のバーンレイジング・コンフィグレーション）(製作：1921年頃、インディアナ州。H0279282)

現在、アーミッシュ・キルトをテーマとした企画展(六月二十一日(九月十八日)の準備をしている。アーミッシュ・キルトは、米国のキリスト教再洗礼派アーミッシュの中でも、聖書の解釈に基づき馬車を使い、昔ながらの生活を守るオールドオーダー・アーミッシュによってつくられてきた。簡素な生活と無地の服装というきまりに従い、主として無地の布を利用しベッドカバーなど生活用品として作られたキルトは、思いがけない色を組み合わせた幾何学的なデザインで注目を集めてきた。

一九八〇年代以降、米国ではキルト・ドキュメンテーション活動がさかんで、アーミッシュ・キルトについては、インディアナ州をはじめ

中西部の家々を訪ねまわって譲り受けたボツインジャーコレクションが有名である。二〇一一年から三回の収集によるみんぱくコレクション製作の過程もささやかなキルト・ドキュメンテーション活動の時間であった。

結婚は、若者たちが洗礼を受けてアーミッシュとなり、生涯変わらぬ家族と教会コミュニティを支えていく決意の証である。大切にしまってきた母親からの結婚祝いのキルト(写真1)を、妻とともに二晩考えた末に民博に譲ることを決めてくれた六十代のアーミッシュも、キルトに込められた様々な気持ちを伝えたいと考えたのかもしれない。キルトを手渡してくれた日にミートボール、インゲン、マッシュポテトのアーミッシュ料理の夕食に招いてくれ、今は亡き母親と現在の家で共に暮らした日々を懐かしそうに語った。明るい色と暗い色の布の端切れを組み合わせるサンシャイン・アンド・シャドウのパターンは陽射しと影を表現しており、布を大切に使うというアーミッシュの考え方に合致し、長年親しまれてきた。アーミッシュの最も古い居住地東部ペンシルヴェニア州ランカスターの特徴である幅広のボーダー(縁)には、花のデザインで表布、中綿、裏布を縫い合わせるキルティングがなされている。

一方、ログキャビン(丸太小屋)と呼ばれるパターンは、イリノイ州の簡素なログキャビンで誕生したリンカーン大統領にちなんだ名ともいわれている。暖炉のイメージの暖色の布を中心に丸太とみなされる細い布の端切れを縫い合わせるこのパターンは、儉約の精神と楽しみを実現するものとして広く米国で愛されてきた。なかでも写真2のキルトは、バーンレイジングの形で、社会保障に頼らず相互扶助を重視し、みんなで納屋を棟上げするアーミッシュが多く作ってきたものである。人生のさまざまな機会に贈られるキルトには、謙遜を信条とするアーミッシュもイニシャルや年月を縫い込む。このキルトにも贈り手あるいは受け取り手のイニシャルが縫い込まれており、結婚や新しい土地へ出立する人びとへの饞などであったと推測される。

また、共通の目的に向けた募金用キルト作りは一般社会と同様、アーミッシュのあいだでも盛んである。集まってキルトを仕上げるキルティング・ビーや、仕上げた募金用キルトのオークションへの参加は、アーミッシュのあいだでも豊かな交流の時間を人びとに与えてきた。キルトは、一般社会から距離を保ち現代社会における生き方を模索するアーミッシュが、環境や様々な文化とどのように交流し世界を織り上げることに参加してきたのかを照らし出している。

(鈴木七美)